

パブリック・スピーチにおける問いかけの メタ言語的機能について

The Meta-linguistic Functions of Questioning in Public Speaking

櫻田 怜佳
SAKURADA Reika

[要旨] 本稿は、アメリカ英語母語話者と日本語母語話者がそれぞれの母語で行うパブリック・スピーチにおいて、語り手が聴衆に問いかける場面に着目し、聴衆への問いかけがスピーチの中でどのような機能を果たしているのかを明らかにすることを旨とするものである。スピーチにおける問いかけには、1) 課題の焦点化や解説などスピーチの進行を促進する「メタ言語的機能」と、2) 聴衆とのインタラクションを深める「相互協調的機能」という2種類があることがわかった。本稿では、「メタ言語的機能」を持つ問いかけに焦点を当て、談話構造における“global theme”と“local theme”という観点を援用しながら、問いかけの機能を類型化し、それぞれの特徴について例説した。

[キーワード] TED Talks、パブリック・スピーチ、日英語比較、問いかけ、疑問文

[Abstract] This study examines expressions when questioning in the context of public speaking in American English and Japanese. Focusing on the function of each interrogative utterance, two roles are found: 1) meta-linguistic function that promotes the flow of speech and 2) interactive function that deepens the ties with the audience. This paper investigates the former (meta-linguistic function). They are classified into five categories from the perspectives of “global theme” and “local theme” by focusing on the range of questioning that can be affective in speech.

[Key Words] TED Talks, public speaking, comparison of English and Japanese, questioning, interrogatives

1. はじめに

本稿は、アメリカ英語母語話者（以下、英語母語話者）と日本語母語話者がそれぞれの母語で行うパブリック・スピーチにおいて、語り手が聴衆に疑問文を用いて問いかける場面に着目し、その特徴を分析することを通して、聴衆への問いかけにはどのような機能があるのかを明らかにすることを旨とするものである。

パブリック・スピーチとは、語り手が自分のアイデアを公にすることであり、人々とアイデアを共有したり、人々に影響を与えたりする手段であると考えられている (Lucas 2011)。例えば、政治家による演説や企業における商品の宣伝、学会における研究発表などの場面が挙げられる。スピーチにおける語り手が日常会話と大きく異なる点は、参加者の構造である。スピーチは、語り手が情報を提供し、聴衆が受け取るという関係に固定されており、すなわち、情報が伝達される向きは一方向に規定されているといえる。このような特徴から、参加者間の相互行為を伴わない

「一人語り (monologue)」と解釈されることが多くある。もし、この解釈の通りであれば、聴衆から応答を求める発話はなされないことが想定されるが、実際には、相手の応答を引き出す言語形成である疑問文を用いた問いかけを聞くことも多い。スピーチでは、聴衆への問いかけがなくとも、語りは成立するようにも考えられるが、なぜあえて問いかけを行うのだろうか。このような場面に着目すると、スピーチは語り手一人で完結するものではなく、明らかに一対多のやりとり (interaction) であることが見出される。本稿では、英語母語話者と日本語母語話者のスピーチにおける問いかけの機能を類型化し、そこから見出される各言語話者のスピーチにおける特徴を考察する。

2. 先行研究

2.1. 問いかけとは

「疑問」や「疑問表現」という用語は、命題内容に対して話し手が判断を形成することができないという「疑い」の側面と、聞き手に問いかけてその疑念の解消を目指すという「問い」の側面があり (山口 1983、日本語学大辞典 2018)、狭義には、相手に応答を求める要求表現であるとされている (国語学辞典 1980)。また、「質問」という用語は、植野 (2014) によれば、「疑問を問い質すことを示し、相手への働きかけに重点を置いた表現でない」一方で、「問いかけ」は「問いをもって相手に作用を及ぼすという、相手を強く意識した働きかけの意味を含む」と説明されている。

本稿では、スピーチにおける問いかけは、語り手の疑いを聴衆に問うという性質を持たないという点に加え、後に述べるように、聴衆の存在を強く意識した発話であると考えするため、植野 (2014) を参考にして「問いかけ」という用語を使用し、そのうえで、問いかけに用いられる文の言語形式は「疑問文」と呼ぶことにする。

2.2. 問いかけの言語形式と機能

問いかけの言語形式には、疑問文 (interrogatives) が使用される。疑問文の条件は、英語では、1) 疑問詞を含む、2) (助) 動詞と主語の位置が逆転する、3) イントネーションが上昇するという3つの中のいずれかの特徴を持つこと (Freed 1994、Ginzburg 1964)、日本語では、1) 文末に助詞「か」を添える、2) 文中に疑問詞を用いる、3) 文末の音調が上がるという3つの中のいずれかの特徴を持つことが典型とされている (山口 1983、宮崎 2005)。なお、現代日本語の疑問文において、多くの場合、「か」は省略される傾向にあり、「ね」や「でしょう」という表現が用いられることが指摘されている (Tanaka 2010)。

また、疑問文が持つ機能は、多岐に渡ることが多くの研究において論及されている。Freed (1994) は、実験的場面における12組の会話において抽出された1275の疑問文による発話の機能を16の範疇に分類している。これらの範疇は、線状に連続体の関係で示することができるという。連続体の一端は、聞き手に新情報の提供を求めるという情報要求の機能を持つもので、その対極に位置するものは、話し手の感情を表出する機能を持ち、聞き手から情報を求めない疑問文⁽¹⁾

であると説明している。

2.3. 聞き手から応答を求めない疑問文

疑問文の発話は、自分の中で不確かである事柄について相手から情報を得ることを目的として行われるものであると定義づけられている。Goody (1978) は、問いかけは、相手からの反応を強いる性格があり、言語行為 (speech act) のなかでも特に強い発話内効力 (illocutionary force) を持つと説明している。

一方、前項 (2.2.) の最後に述べたように、情報を求める意図なく発せられる疑問文も存在する。「修辞疑問 (rhetorical question)」はその代表である。話し手には聞き手から解答を得る意図はなく、自分が発した問いに自ら答える形式のことである。例えば、“Who knows? Nobody knows.” という発話における疑問文は、自分の主張 (後続する解答) を強調する意図がある。後続する解答は単独で用いるよりも、問いかけの後に続けて「反語」の形をとる方が断定の意味合いが増し、文の意味が強調されるという効果を生み出すと言われている。

同様に、高橋 (1999) は、疑問文を用いた話し手あるいは書き手が、自らその答えを示すものを「自問表現」と定義している。特徴として、論文や講義のジャンルでよく用いられ、説明・解説の表現を構成していると述べている。また、これまでの疑問文に関する研究の大部分は、話し手が疑問に思っていることを尋ねて聞き手が答えるという「典型的疑問表現」に焦点を当てたもので、それ以外の疑問文に注目した研究はあまり見られないと指摘している。

2.4. 使用場面によって異なる問いかけの意味合い

Tanaka (2015) は、問いかけは、どのような場面で発話されたかによって異なる意味をもたらすことを指摘し、文の形式や機能だけではなく、発話されたコンテキストとの関わりを見ることが重要であると指摘している。これまでの研究は、日常会話における問いかけに着目するものが大半であったが、Heritage and Roth (1995) によるニュース番組のインタビューにおける問いかけの研究を機に、仕事場や医療現場でのやりとり、友人同士の会話、見知らぬ人との会話など、さまざまな組織談話が扱われるようになり、発話場面によって問いかけの機能は異なるということが明らかにされてきている (Freed and Ehrlich 2010, Tanaka 2015)。

スピーチにおける問いかけは、聴衆の注意を引きつける “attention getter”、または、聴衆に深く考えさせる修辞法であると言われているが (Lucas 2011)、問いかけの個々の発話を詳細に分析するものは見られず、未だ概括的な定義に留まっている。同様に、スピーチの効果的な語り方を教示する書籍では、問いかけの使用を推奨する記述が多く見られるが、問いかけの特徴や機能を体系的に分類し、考察するものは見当たらない。

3. データと分析方法

3.1. データ

本研究では、“TED Talks” という名称で広く知られているスピーチをデータとして用いる。

これは、TED (Technology, Entertainment and Design) という団体が主催するスピーチのイベントで、研究者や小説家、政治家など多岐にわたる分野の人物が登壇し、多人数の聴衆に向かって「広める価値のあるアイデア」というコンセプトのもと、15分程度のスピーチを行うものである。本研究では、以下のスピーチをデータとして用いる⁽²⁾。

- ◆ アメリカ英語母語話者が英語で行うTEDGlobal (2012年) におけるスピーチを計12本
- ◆ 日本語母語話者が日本語で行うTEDxTokyo (2011~2014年) におけるスピーチを計12本

3. 2. 分析方法

本研究では、スピーチにおいて語り手が問いかけを行う場面に着目する。聴衆からの解答や情報の提供は見込まれないにもかかわらず、なぜ聴衆の応答を引き出す言語形式を使用するのかという疑問を究明するため、スピーチにおける問いかけの機能を分析する。上記の理由から、疑問文であっても、他人から尋ねられた疑問文の引用は、本研究の分析対象に含まないものとする。

4. 分析の結果

まず、語り手の問いかけに対する聴衆の反応について述べる。本稿の冒頭で、スピーチの参与者構造は、語り手が情報を提供し、聴衆が受け取るという関係に固定されることを述べた。これに従えば、語り手が聴衆から応答を受け取ることはないということになる。実際のスピーチを観察すると、想定されるように、問いかけに対して聴衆が声をあげて解答し、情報を提供することは見られなかった。しかし、問いかけに対して、聴衆が、笑いや頷きなどの反応を見せる場面や、答えが予測可能な問いかけや聴衆に行動を勧める問いかけに対しては、拍手や歓声が起こることが、両言語に見られた。このような場面では、語り手は、微笑み、頷きながら話を進めたり、話を中断してお礼を述べるなど、聴衆からの反応を受け取る様子が観察され、問いかけが行われる場面では双方向性のやりとりが成立していることが分かった。次項では、問いかけがスピーチにおいてどのような機能を果たしているのかについて分析の結果を示す。

4. 1. パブリック・スピーチにおける問いかけの機能

各言語12本のスピーチにおいて問いかけは、英語母語話者のスピーチには123例、日本語母語話者のスピーチには44例観察された。これらは、2種類の機能に大別できる。1つ目は、「メタ言語的機能」をもつ問いかけである。メタ言語とは、言語（メッセージを伝えるコード）についての言語のことを意味する。例えば、あることばについて別のことばで言い換えたり、そのことばの意味を説明するという言語行動が挙げられる (Jakobson 1980)。スピーチにおいては、語り手自身がすでに語ったこと、あるいは、これから語ろうとしていることに言及するメタ言語的機能をもつ問いかけの使用を通して、用語を解説したり、話題の焦点を絞る様子が見られた。語り手は、これまで何を語ったか、または、これから何を語ろうとしているかを整理して伝えており、このような談話におけるメタ言語は、西條 (1999) によれば、「今、何について話しているか」に触れ、自分の談話の構造を作りながら、聞き手に談話の展開方向に関する予測を与えている。

スピーチでは、聴衆に対して、これまでに語った内容の意味を確認したり、これから語られる内容の予測を促し、理解の基盤を築くことに貢献していると考えられる。

2つ目は、「相互協調的機能」をもつ問いかけである。これは、「ご存知ですか？」や「みなさんも似たような経験があるのではないのでしょうか？」というように聴衆の知識や経験を尋ねたり、「どう感じになりますか？」というように感情を問うもので、聴衆とのインタラクションを深めることに貢献していると考えられる。以下の表1は、それぞれの機能の発生回数および頻度を示したものである。

表1 英語と日本語のスピーチにおける問いかけの「メタ言語的機能」と「相互協調的機能」の発生回数と頻度

	「メタ言語的機能」の発生回数と頻度		「相互協調的機能」の発生回数と頻度		発生回数の合計	
英語母語話者	84	68.3%	39	31.7%	123	100.0%
日本語母語話者	22	50.0%	22	50.0%	44	100.0%

2つの機能を比較すると、英語母語話者は「メタ言語的機能」を持つ問いかけを「相互協調的機能」の約2倍の頻度で使用しており、一方、日本語母語話者は両方の機能を同頻度で使用していた。これらの問いかけが行われた場面に着目し、機能をより詳細に分析した結果を以下に示していく。

まず、「メタ言語的機能」の問いかけは、問いかけの直後に解答が示されるものと、解答がすぐに明らかにされないものという2種類のパターンが観察された。これは、談話構造における“local theme”と“global theme”という観点から解釈することができる。 “local theme”とは、統語構造における句や文レベルの局所的な単位を表し、これに対して、“global theme”は、パラグラフやエピソードを超えて広範囲にわたる単位を表す (van Dijk 2011)。 Fujii and Kim (1998) では、日本語母語話者が語るナラティブは、出来事を中心となる局所的なテーマ (local theme) と、談話全体を通して流れる大局的なテーマ (global theme)、直前に示されたテーマ (previous theme) の3つが有機的に関連し合っていると説明されている。このテーマ構造に関する“local theme”と“global theme”という2つの観点は、スピーチにおいて、問いの直後に解答が示される局所的なもの、解答が後に引き伸ばされる大局的なものという2種類の仕組みを説明するために有用であるといえる。この観点を援用し、分析した結果、次の5つの機能に類別できた。まず、“global theme”に関わる問いかけには2種類の機能が見られた。一つ目は、〈主題を提示する〉機能である。スピーチは、エピソードの積み重ねによって形作られる。そのなかで、一つのエピソードあるいはエピソードを超えた広い範囲に通底する中心的な話題を提示するものを指す。二つ目は、「～してはどうか」のように聴衆に〈行動を勧める〉機能である。次に、“local theme”に関わる問いかけには、3種類の機能が見られた。一つ目は、用語や概念の〈解説を導く〉機能である。二つ目は、話題を導入するきっかけを作ったり、話題を掘り下げて具体化するなど、これから語られる〈話題の焦点を絞る〉機能である。三つ目は、答えが明白な問いを投げかけることによって〈主張を強調する〉機能である。

また、「相互協調的機能」の問いかけは、3種類に大別される。一つ目は、〈聴衆の知識や感情を問う〉機能である。問いかけの直前または直後の情報について聴衆の知識状態を問う発話や、感情を尋ねる発話が観察された。二つ目は、冗談を交えて問いかけ、〈笑いを誘う〉機能である。三つ目は、直前の発話に対して聴衆に〈同意を促す〉機能である。以上に列挙した機能を図式化したものが、以下の図1である。

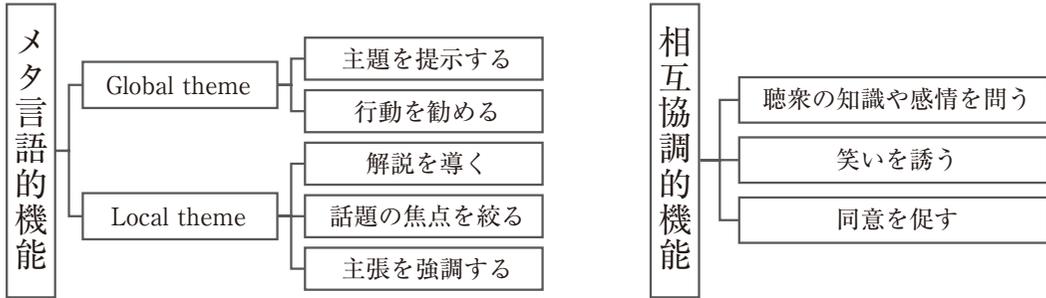


図1 パブリック・スピーチにおける問いかけの機能

本稿では、左図の「メタ言語的機能」を持つと考えられる5種類の問いかけに焦点を当て、英語母語話者(4.2.)と日本語母語話者(4.3.)のスピーチの分析結果を詳述する。

4.2. 英語母語話者のスピーチ

まず始めに、英語母語話者のスピーチにおける「メタ言語的機能」の問いかけの発生回数および頻度を見ることを通して、それぞれの機能の使用傾向を確認したい。

表2 英語母語話者のスピーチにおけるメタ言語的機能の問いかけの発生回数と頻度

問いかけの機能	global theme		local theme			発生回数の合計
	主題を提示する	行動を勧める	解説を導く	話題の焦点を絞る	主張を強調する	
発生回数	12	1	20	33	18	84
頻度 (%)	14.3	1.2	23.8	39.3	21.4	100.0

英語母語話者は、“local theme”に関わる問いかけを、“global theme”の約5倍の頻度で使用していることが見出された。なかでも、〈話題の焦点を絞る〉機能が多く使用される傾向が明らかになった。

4.2.1. “global theme”に関わる問いかけ

“global theme”に関わる問いかけは、〈主題を提示する〉、〈行動を勧める〉という2種類の機能が見出された。まず、〈主題を提示する〉問いかけの実例を見ていく。例(1)は、非言語行動がいかにかの思考や判断に影響を及ぼすかを説明する場面で、「非言語行動は一種のことばであり、コミュニケーションである」という主張に続けて行われた発話である。スピーチの2番目

に語られたエピソードの序盤に位置していた。抜粋では、枠囲み部は問いかけ、二重下線部は問いに対する解答を示している。

(1) So what is your body language communicating to me? What's mine communicating to you? And there's a lot of reason to believe that this is a valid way to look at this. So social scientists have spent a lot of time looking at the effects of our body language, or other people's body language, on judgments. And we make sweeping judgments and inferences from body language. 《中略：非言語行動が思考や判断に与える影響に関する実験の内容と結果について》 So, when we think of nonverbals, we think of how we judge others, how they judge us and what the outcomes are. We tend to forget, though, the other audience that's influenced by our nonverbals, and that's ourselves. [1]

例(1)の問いかけは、エピソードの中核をなす「非言語行動は相手に何を伝えるのか」という主題を提示している。エピソードの序盤でこれから語られることを説明していることから、メタ言語であるといえる。例(1)では、問いに対する解答はすぐには示されず、文を数えると、問いかけから12文後に解答が与えられていた。このように、問いと解答は隣接ペアとして連結して現れるものではなく、解答が示されるまでに複数の発話やエピソードが挿入されていたり、解答が明示されないものも見られた。問いから解答までは平均38文、広域なものでは100文後に解答が示されていた。つまり、〈主題を提示する〉問いかけは、すぐに解答が示されて解決する一時的な性質のものではなく、問いかけの影響がエピソードの広範にわたるものであるといえる。その構造を見ると、例(1)のように、[問い (枠囲み部) + 問いの意義または根拠 (下線部) + 解答 (二重下線部)] という仕組みが見られた。また、言語形式を見ると、全12例のうち9例は、自由回答式の疑問詞疑問文 (open-ended question) であり、解答に制限がないため、幅広い観点からの思考を促していると考えられる。解答が“yes”あるいは“no”に制限される真偽疑問文 (closed question) の3倍多く見られた。

次に、〈行動を勧める〉機能を持つ問いかけは、以下に例示する1例のみ見られた。

(2) It's spaces like these that spawned personal computing. Why not personal biotech? If everyone in this room got involved, who knows what we could do? This is such a new area, and as we say back in Brooklyn, you ain't seen nothin' yet. [2]

例(2)の語り手は、バイオテクノロジーの情報や技術を公に開く取り組みを行っている。コンピュータの利用が普及したことを引き合いに、バイオテクノロジーも多くの人にとって身近なものになるよう人々の参加を推奨する発話である。また、後続発話も疑問文だが、これは後に示す〈主張を強調する〉機能に該当するものと考えられる。

4.2.2. “local theme” に関わる問いかけ

“local theme” に関わる問いかけは、〈解説を導く〉、〈話題の焦点を絞る〉、〈主張を強調する〉という3種類の機能が見出された。共通する特徴は、問いの直後に解答が示され、問いかけが局所的に働いているという点である。一つ目に、〈解説を導く〉問いかけには、以下のような発話が観察された。

(3) Why is Twitter so successful? Because it opens up its platform. [3]

(4) When I say minds, in the case of the powerful, what am I talking about? I'm talking about thoughts and feelings and the sort of psychological things that make up our thoughts and feelings, and in my case, that's hormones. [1]

観察された20例すべてが疑問詞疑問文であり、例(3)のように対象について問うものと、例(4)のように主格に語り手が現れ、解答は語り手しか知り得ないものという2種類の表現パターンが見られた。後者は、日本語母語話者のスピーチには観察されなかったため、英語母語話者の問いかけに特有の表現であるといえる。

二つ目に、〈話題の焦点を絞る〉機能は、聴衆が思い浮かべるであろうさまざまな選択肢のなかから、語り手が次に語りたい話題に注意を一挙に引きつける“attention getter”としての機能を持つと考えられる。次のような発話が観察された。例(5)は、病歴や遺伝子情報などの個人の医療データを公に開かれたデジタル・システムで共有することによって、現代の科学を進展させることができるという主旨のスピーチにおける冒頭の発話である。

(5) The bad news is that we all get sick. I get sick. You get sick. And every one of us gets sick, and the question really is, how sick do we get? Is it something that kills us? Is it something that we survive? Is it something that we can treat? And we've gotten sick as long as we've been people. And we've always looked for reasons to explain why we get sick. And for a long time, it was the gods. [4]

例(5)の問いかけは、本筋である専門的な話題の前段階として、関心のきっかけを作るために、話題の入り口となることに寄与していると考えられる。このような《話題を導入する》働き⁽³⁾は、〈話題の焦点を絞る〉機能を持つ33例の中で18例観察された。問いかけの直後には、「病気の要因」という話題に移行していることから、これらの問いかけは、エピソード全体の枢軸となる主題ではなく、エピソードの一部のみに働く局所的なものであるという点で、前述した“global theme”に関わる〈主題を提示する〉機能とは異なるといえる。このほかに、すでに示された話題を問いかけによって掘り下げて焦点を絞る《話題を具体化する》働きを持つ問いかけが15例観察された。これは、6箇所で見られるが、そのうちの4箇所では、複数の問いかけが連続して用いられていた。以下の例(6)の語り手は、ビジネススクールの学生たちを見て、身体を大きく伸ばした姿勢をとる学生は授業に積極的に参加する一方、小さく縮こまるような姿勢をとる学生は

消極的である傾向に気づき、これを逆手にとって、身体を大きく見せるように振る舞うことによって積極性を高められないかと考えている。抜粋では、4度の問いかけが最終的に1つの解答を導いている様子を、枠から下方向に伸びる直線によって表している。

(6) So, I started to wonder, you know, okay, so you have these people coming in like this, and they're participating. Is it possible that we get people to fake it and would it lead them to participate more? So, my main collaborator Dana Carney, who's at Barkley, and I really wanted to know, can you fake it till you make it? Like, can you do this just a little while and actually experience a behavioral outcome that makes you seem more powerful? So we know that our nonverbals govern how other people think and feel about us. There's a lot of evidence. But our question really was, do our nonverbals govern how we think and feel about ourselves? There's some evidence that they do. So, for example, we smile when we feel happy, but also, when we're forced to smile by holding a pen in our teeth like this, it makes us feel happy. So when you feel powerful, you are more likely to do this, but it's also possible that when you pretend to be powerful, you are more likely to actually feel powerful. [1]

上記のように、問いかけの連鎖によって話題を具体化しながら、問いが導く解答には根拠があることを示し（下線部）、解答を導いていることも特徴であった。また、直前の話題を具体化する際に、問いかけに対する解答が明示されない例も見られた。例（7）では、恐怖は見方を変えると豊かな想像力であり、未来を予知できる能力であるという主旨のスピーチにおいて、「恐怖は、別の名前で言い換えることができる」という発話の後に、疑問文が現れている。

(7) Now we might just as easily call these fears by a different name. What if instead of calling them fears, we called them stories? What if we thought of fear as an amazing act of the imagination, something that can be as profound and insightful as storytelling itself? It's easiest to see this link between fear and the imagination in young children, whose fears are often extraordinarily vivid. [5]

「恐怖を物語と言い換えてみてはどうだろうか？」という問いかけは、直前の「恐怖は、別の名前で言い換えることができる」という話題を具体化している。ここで見られる疑問文は、聴衆に新たな視点を与える提案の意味合いを持っている。このとき、行動を強制する命令（行為指示）文のような言語形式ではなく、疑問文を用いて働きかけることは、行動経済学における「ナッジ理論⁽⁴⁾」の手法に当てはまるのではないかと考えられる。

三つ目は、〈主張を強調する〉機能である。解答が明白な問いかけによって反語の形をとり、主張を断定的に示して強調するものである。

(8) Was the Internet actually a place that you could visit? Could I go there? Who would I

meet? Was there something actually out there? And the answer, by all accounts, was no. [6]
 (9) Artists are explorers. Who better to show us the city anew? Artists can take us to a far-flung part of the city that we haven't explored, or they can take us into that building that we pass every day but we never went into. [7]

例(8)は、「インターネットは実在する形ある場所なのか」を問い、その解答は“no”と明示されている。反語を用いて語り手の主張が断定的に伝えられている。一方、例(9)は、「芸術家以外の誰が街の新しい面を見せることに優れているか」という問いに対して、その解答になるであろう“Nobody else.”のような発話は省略されているが、語り手の真意は、前後の発話から推測することができる。

以上の結果、英語母語話者は、話を次々に進めるのではなく、“local theme”の問いかけを通して都度聴衆に思考する機会を与えてから主張を述べることにより、情報を整理しているといえる。これらの場面では、疑問文が発話されるまさにその時に、聴衆が答えを共に考えるというあり方が期待されていると考えられる。

4.3. 日本語母語話者のスピーチ

日本語母語話者による12本のスピーチでは、問いかけの発生回数と頻度を記した表1に見られたように、「メタ言語的機能」と「相互協調的機能」はそれぞれ22例ずつ同頻度で用いられていた(4.1.2)。そのうち、「メタ言語的機能」を持つ問いかけの発話機能は、表3に示すように、英語母語話者のスピーチと同様の分類が見られた。

表3 日本語母語話者のスピーチにおけるメタ言語的機能の問いかけの発生回数と頻度

問いかけの機能	global theme		local theme			発生回数の合計
	主題を提示する	行動を勧める	解説を導く	話題の焦点を絞る	主張を強調する	
発生回数	2	1	1	9	9	22
頻度 (%)	9.2	4.5	4.5	40.9	40.9	100.0

表3に示されるように、日本語母語話者のスピーチにおける「メタ言語的機能」の問いかけは、“local theme”の〈話題の焦点を絞る〉、〈主張を強調する〉機能が全体の8割を占める大部分を担っている。

4.3.1. “global theme”に関わる問いかけ

〈主題を提示する〉機能は、例(10)の場面にて2例観察され、どちらも疑問詞疑問文で発話されていた。英語母語話者と同様に、〈主題を提示する〉機能では、幅広い思考を促していると考えられる。

(10) 今、日本社会は極めて少子化なのはご存知だと思います。では、なぜ少子化なのでしょう？

なぜ日本の女性は子どもを産みたくないのでしょうか？私は身を持って体感したので知っています。〈中略：育児の大変さに関する実体験〉夫の長時間労働こそが実は真の少子化の原因だと私は思っています。 [9]

例 (10) の問いと解答は、エピソードに通底する「少子化の要因」という中心的な話題を示している。問いから11文後に解答が与えられ、[問い+実体験に基づく根拠+解答]という英語母語話者と同様の仕組みが見られた。

次に、〈行動を勧める〉機能は、例 (11) の場面にて1例観察された。例 (11) は、歴史的建造物の趣ある雰囲気の中にある看板のデザインが無粋なことを指摘し、デザインの刷新を提言するスピーチの結語として、以下のように、聴衆に語りかけ、行動を勧める問いかけが見られた。

(11) 日本の美の最大のコンセプトは調和です。その調和を取り戻すためには、皆さんの力も必要です。だからどうか、プロジェクトを一緒にやりませんか？ありがとうございました。 [10]

“global theme” の問いかけは、全22例の中で以上の3例 (13.7%) と少ない頻度であった。

4.3.2. “local theme” に関わる問いかけ

“local theme” に関わる一つ目の〈解説を導く〉機能は、次の1例が観察された。例 (12) は、海上に先端技術を組み入れた新しい環境都市を創造する構想を語るスピーチにおいて、その必要性を語る前段階として、都市が抱える問題の一つである地震に対する現在の取り組みについて語っている。

(12) 右の建物が免震建物です。下のゴムがしなるために、上の建物は、大きな船に乗ったようにゆっくりと揺れます。天井は落ちず、家具は倒れないということです。建築費の約3%くらいの投資で、本当の安全が確保できるという技術です。現在日本では2500棟くらいの免震建物があります。では、もともと建っている建物はどうしてくれるんだということになりますね？この写真は、みなさんよくご存知の歴史的建造物の一部です。ところが、建った後しばらくして建物をジャッキアップしてます。 [11]

例 (12) では、文末の終助詞が上昇のイントネーションで発話される疑問形の発話によって聴衆に問いかけた後、すぐにその解答が示され、解説が行われていた。

二つ目に、〈話題の焦点を絞る〉機能は、観察された9例すべてが、次の話題に注意を引きつけ、《話題を導入する》働きをしていた。例 (13) は、直前のエピソードでは、漆という漢字がその使用や特徴を如実に表していることを説明しており、それを下地に、新たな話題を導入するために問いかけが行われている。

(13) 要するに液はどう役立つか？この、やはり、漆の幹に傷をつけて出すわけですけども、こ

れは人間でいうと血液と一緒にです。私達のこの皮膚に傷をつけると、血が出て、かさぶたを作って、そして、身を守る。これ、漆も、やはり傷がつくと、底に樹液が集まって、空気中の水分や、あるいは温度、これと反応して固まって自分の身を守るんです。 [12]

最後に、〈主張を強調する〉機能は、9例観察され、例(14)のように、文末に「～ではないか」という否定疑問が使用される傾向が見られた。また、これらは、エピソードの後半で使用される傾向があり、語り手の伝えたいことが十分共有された段階で問いが投げかけられていた。

(14) 1年間に毎年1億トン以上のプラスチックが作られています。このプラスチックの6割がなんと石油に戻すことができるんです。プラスチックが石油に戻る。1キログラムから1リッターの石油ができます。これは誠に、プラスチック自体が油田だと言えるのではないのでしょうか? [13]

例(14)のような否定疑問は、聞き手に尋ねる段階で何らかの判断への予測がはたらいっていることを示し(安達1999、太田1980、Lyons1977)、これは「傾き(bias)」と呼ばれる(安達1999)。例(14)から否定の要素を除くと、「プラスチック自体が油田だと言えるのでしょうか?」となり、これは単純に可、不可を尋ねる問いである。一方で、否定疑問を含む「言えるのではないのでしょうか?」は、問いに対して聴衆も理解や共感を示してくれるであろうという語り手の判断が暗に示されており、スピーチの中で聴衆と基盤を構築できていると想定した上でなされた発話であると考えられる。日本語母語話者のスピーチにおけるすべての疑問文の形式を見ると、否定疑問の問いかけが全体の25%にあたる11例観察された。英語母語話者のスピーチでは、否定疑問は全体の1%にあたる2例のみであったため、日本語母語話者が多く使用する形式であることが見出された。

以上の結果、日本語母語話者のスピーチでは、〈話題の焦点を絞る〉、〈主張を協調する〉機能の2つが全体の8割を占める大部分を担い、話を始めるために聴衆と理解の基盤を作る場面と、聴衆と理解の基盤を共有した後で念押しのように確認する場面で、聴衆に働きかける言語的機能が用いられているといえる。これは、スピーチの至る所で“local theme”に関わる問いかけが行われている英語母語話者と異なる点といえる。

5. 考察

英語母語話者と日本語母語話者のスピーチを比較することによって、問いかけという言語行為にも、それぞれの言語話者に異なる使用の実態があることが見出された。ここで、本稿の冒頭に述べた「聴衆への問いかけがなくとも、語りは成立するようにも考えられるが、なぜあえて問いかけを行うのか」という疑問を検討したい。スピーチにおける問いかけは、スピーチが一人語りではなく対話なのだという空気を疑似的に作り上げることに資するのではないかと考えられる。英語母語話者は、短時間のうちに複数の問いかけを連続して行い、対話をしているようにスピー

チを進めていた。聴衆に発言を求めることはないが、問いかけに対して心の中で答えてもらうという構造が望まれ、共に考えるというあり方に導く手法が見出された。アメリカでは、ソクラテス・メソッド（問答法）に基づき、問いによる対話の中から新たなアイデアが生まれるという考え方がある。この特徴は、アメリカの大学教育にも見受けられる。ハーバード大学哲学科教授のマイケル・サンデル氏の講義⁽⁵⁾は、教師が学生に答えを与えるのではなく、問いかけによって主体的に問いに向き合う機会を提供し、対話を重視した方法で作りに上げられることが特徴である。英語母語話者が問いかけを多く用いる一つの要因として、教育の影響が示唆される。

日本語母語話者のスピーチにおける問いかけは、話を始める場面と話をまとめる場面において、聴衆の理解の基盤を作ったり、共有を確認していることが見出された。英語母語話者と比較すると頻度は少ないことが明らかになったが、聴衆の考えを予測して発話する否定疑問が多く見られ、聴衆の視点を含んでいることがわかった。また、スピーチ全体を通して終助詞「ね」を使用した語りかけが行われ、これらの特徴は、語り手が聴衆の存在を強く意識していることの証左となるといえる。

6. 結論

本稿では、英語母語話者と日本語母語話者のパブリック・スピーチにおける問いかけに着目し、その特徴を分析して、機能を類型化した。その結果、各言語話者のスピーチの運び方が顕在化し、異なりがあることが見出された。分析したすべてのスピーチにおいて疑問文の発話が観察され、語り手は問いかけを通して聴衆に働きかけながら話を進めていることが明らかになった。このことから、スピーチは、語り手一人で完結するものではなく、聴衆の存在を強く意識しており、明らかに一对多のやりとりであると言える。

昨今の日本社会では、人前で説得的に物事を伝える能力が求められる場面が増えている。これまで、スピーチにおける語り方を教示する多くの書籍では、問いかけによる聴衆への働きかけを推奨する反面、どのように問いかけるかという具体的な方略は提案されてこなかったが、今後、より多様かつ多数のスピーチにおける疑問文の使用を多角的に分析し、問いかけの様相を精緻化することによって、伝えたい内容に適した問いかけの方法を示すことが可能になり、実践場面における助けになり得るのではないかと考える。

注

- (1) Freed and Ehrlich (2010) は、聞き手から情報を求めない疑問形式の発話として、“How could you?” を例に挙げている。これは、疑問文を用いているが、聞き手に解答を求めるものではなく、話し手が聞き手に対して感じている非難や憤りなどの感情を表明する発話であると説明している。
- (2) TED Talksの母体であり最大規模のTED Conferenceにおける方針と形式を踏襲して、現在世界60カ国以上でイベントが開催されている。本研究では、英語母語話者と日本語母語話者のスピーチを比較するにあたり、参加者の規模が同程度のイベントを分析の対象とした。スピーチの映像は、公式サイトやYou-Tubeなどインターネット上に無料で配信されており、現在3,200本を超える動画が公開されている。メディアを介して公に開かれ、その場限りのものではないという点は、TED Talksの特徴であり、語り手は、会場の聴衆だけでなく、映像を視聴する人々の存在も意識している可能性が考えられる。

- (3) 機能の種別について、5種類の機能は〈山括弧〉で括り、その下位分類となる働きは《二重山括弧》を用いて表記している。
- (4) ナッジとは、しつこく強制する (nag) よりも、軽く肘を突く (nudge) ような小さなきっかけを与えて、人の行動を変えようという理論に因る。個人の自由や自主性を重んじるリバタリアニズムに端を発した考えである。
- (5) マイケル・サンデル教授の講義は、ハーバード大学で最も人気のある講義であり、建学以来初めて講義の様子が一般に公開された。日本では、2010年4月から6月までNHK 教育テレビの『ハーバード白熱教室』という番組で放送された。学生と対話をしながら進めることが特徴であり、1000人を超える受講者に対して質問を投げかけ、学生の意見を聞き、議論を展開する様子が日本でも大きな話題を呼んだ。

参考文献

安達太郎. 1999. 日本語疑問文における判断の諸相. くろしお出版.

Austin, John. 1962. How to Do Things with Words. Cambridge: Harvard University Press.

Freed, Alice. 1994. The Form and Function of Questions in Informal Dyadic Conversation. *Journal of Pragmatics*. 621-644.

Freed, Alice and Ehrlich, Susan. 2010. Why Do You Ask?: The Function of Questionings in Institutional Discourse. New York: Oxford University Press.

Fujii, Yoko and Kim, Myung-Hee. 1998. Thematic Structure and Subject Assignment in Japanese Narrative Discourse. *Journal of the University of the Air*. 16. 195-209.

Ginzburg, Jonathan. 1964. Interrogative investigations: the form, meaning, and use of English interrogatives. Stanford: CSLI Publications.

Goody, Esther N. 1978. Questions and politeness: Strategies in social interaction. Cambridge: Cambridge University Press.

Heritage, John and Roth, Andrew. 1995. Grammar and Institution: Questions and Questioning in the Broadcast News Interview. *Research on Language and Social Interaction*. 28: 1. 1-60.

Jakobson, Roman. 1980. Framework of Language. Michigan: University of Michigan.

Lucas, Stephen E. 2011. The Art of Public Speaking. New York: McGraw-Hill Education.

宮崎和人. 2005. 「現代日本語の疑問表現：疑いと確認要求」ひつじ書房.

仁田義雄. 1991. 「日本語のモダリティと人称」ひつじ書房.

西條美紀. 1999. 談話におけるメタ言語の役割. 風間書房.

高橋淑郎. 1999. 「自問自答形式の疑問表現」の性格『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』12. 55-76.

Tanaka, Lidia. 2015. Japanese Questions: Discourse, Context and Language. London: Bloomsbury Academic.

植野貴志子. 2014. 「問いかけ発話に見られる日本人の先生と学生の社会的関係」『解放的語用論への挑戦』井出祥子、藤井洋子編. くろしお出版. 91-121.

van Dijk, Teun A. 2011. Discourse Studies: A Multidisciplinary Introduction. SAGE Publications.

山口堯二. 1990. 「日本語疑問表現通史」明治書院.

使用データ

- | | |
|---------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------|
| [1] Amy Cuddy
"Your body language may shape who you are" | [6] Andrew Blum
"Discover the physical side of the internet" |
| [2] Ellen Jorgensen
"Biohacking, you can do it, too" | [7] David Binder "The arts festival revolution" |
| [3] Beth Noveck
"Demand a more open-source government" | [8] Kirby Ferguson "Embrace the remix" |
| [4] John Wilbanks "Let's pool our medical data" | [9] 小室淑恵 "Life balance" |
| [5] Karen Thompson "What fear can teach us" | [10] 太刀川英輔「日本の美を取り戻す」 |
| | [11] 竹内真幸 "Today and tomorrow?" |
| | [12] 室瀬和美「漆と日本文化」 |
| | [13] 伊東昭典 "Liquid power" |

(2019年 日本女子大学大学院文学研究科英文学専攻 博士課程後期3年)